

大阪府立緑風冠高等学校A地区コンクール参加作品

戦え正義のヒーロー達

作…木村光寿

登場人物

オモイ

シロ

コエ

ボセイ

アイ

第一場

舞台上、暗い世界。舞台上に蹲っているコエがいる。下手寄りのやや離れた位置で、オモイがその姿を見つめている。

オモイ「ねえお母さん、あそこ、なんだろう、あれ・・・ほら、あれ。あそこ！変な子がいる・・・
ごめんなさい、指さして。あの子、どうしたのかな。なんで、動かないのかな・・・
死んでるのかな」

オモイ「ねえお母さん、あの子、なんで、ああしてるの？・・・ごめんなさい。わかった、
ごめんなさい。もういいませんから。ごめんなさい」

コエ、やがて動かなくなる。

オモイ「ごめん。何もしてあげられなくて。もう、いかなきゃ。ごめん」

コエの姿が消える。

オモイ「その時生まれて初めて抱いた母へのかすかな憎しみは、今はもうない。多分私が母でもそうしただろうしそうするしかないだろうし、あの子を本当に助けてあげることはできないだろうし。でも、それでも、日曜日、母に手を引かれて街へおもちゃを買いに出かけていた私と、もう二度と出会うことのないであろうあの子との間にある、見えないけれど確実に存在するその壁は、あの時からずっと、私の周りから消えることがない」

オモイ「その壁は私に守られているという安心感を与えてくれた。けれどもそれは、誰かの犠牲の上の幸せを享受している自分への罪悪感に変わっていった。それは、何をしてもどこにいても、消えることがなかった。だからせめて、あの子の不幸を繰り返したくないと思った。早く大きくなって、あの子を救えるようになりたいと願った。そのために、必死に勉強して、誰にも負けないように努力した。そうすれば、皆喜んでくれた。皆ほめてくれた。本当は私が何をしたいのかも何が欲しいのかも知らず、ただただ賞賛と羨望のまなざしを向けてきた。でも、私の心には、あの日あの時、本当は何かを必死で伝えようとしていたはずのあの子のまなざしが、いつも、戒めのようにこの胸に突き刺さっていて」

第二場

舞台上、明るくなる。

舞台上に、座り込んでいるコエとそれを気にしながら立っているボセイ、その近くにオモイが立っている。

ボセイ「こんな感じなんですね、こっちは」

オモイ「ええ、はい。大分、違いますか、そちらとは」

ボセイ「そうですね。そもそも、女子だけの場所ってなくて。むしろでは、男も女も同じだったから」

オモイ「本当は、そうあるべきなんだと思います。男も女も関係なくて、皆仲間なんだから。でもまだ、そこまで進んでいなくて。やっぱり、集団の中で恋愛とかはじまっちゃうと」

ボセイ「ああ」

オモイ「一度、そういうことなりかけて。合法部だから、記事の編集とかブログとかよくやるんですけど。共同で作ってたら、そこからやっぱり、仲良くなっちゃって」

ボセイ「ああ・・・」

オモイ「どうしても、それは。そこから皆、ばらばらになっちゃいそうだったから。やめとこうって。男女で分けるようにしてるんです」

ボセイ「、そうですね」

ボセイ、コエのことが気になる様子を見せる。

オモイ「ああ、えっと、その子もメンバーなんですよ。まだ高校生だけど」

ボセイ「ああ、え。高校生まで参加してるんですか」

オモイ「うちは、その辺全然、ゆるいつていうか。ネットの書き込みからメンバーなったりしてるんで。その子も、それで」

ボセイ「すごいですね、ほんと、全然違う」

オモイ「ちゃんとした活動から見たら、駄目なのかもしれないんだけど」

ボセイ「そんな、全然。大事なことですよ。色々な人が参加するって。そうあるべきじゃないですか」

オモイ「ありがとうございます。うちも、早く」

シロ、アイ、下手より登場。ビニール袋にお菓子をいれて持ってくる。

アイ「戻りました」

シロ「疲れたー」

オモイ「ああ、お疲れ様。とりあえず置いていって」

アイ「はーい」

アイ、シロ、袋からお菓子や缶ジュースなどを取り出し、並べていく。

オモイ「え、こら、ほとんどお菓子だけじゃんこんなの」

シロ「だめでしたかね、やっぱり」

アイ「え、だってパーティですよ。いいんじゃないかって」

オモイ「まあ、もういいけど。お金は皆から出てるんだからさ、大事に考えないとき、」

アイ「はーい」

アイ、シロ、作業し続ける。

ボセイ「あの、手伝いましょうか」

オモイ「ああ、いいえそんな、今日は歓迎会なんですから」

ボセイ「いえそんな。これからは一緒に戦う仲間なんですから」

ボセイ、ごみ袋を出しレイアウトを変える等して作業を手伝う。

アイ「あ、どうも、すみません」

ボセイ「いえ、全然」

オモイ「すみません、どうも。じゃあ一応先に、紹介だけしちゃって、それから歓迎会ってことで」

ボセイ「ええ、はい」

オモイ「じゃあ、いいかな。ごめん、ちよつといいかな？ごめん。一応、新しく来てくれた人の紹介だけ、先にやっちゃいたいんだけど。いい？」

アイとシロ、作業を止める。

オモイ「えっと、こないだ皆にも連絡したけど、これからうちも、他と共同で活動していくことになりました。男子部とも相談したんだけど、やっぱり今のままだとできることに限界があるし、他のところを見て学ぼうっていうことで。とりあえず、男子部から何人か、向こうにいつて実戦的なことを学んでくるんだけど、逆にこっちの活動も、学んでみたいっていうことで。今日から参加してもらいます。じゃあ、自己紹介して」

アイ「あ、はい。えっと、アイってってます。んー、なんだろう、一番大事じゃないです

か、やっぱりそれって。私、昔、学校いなくなってフラフラして、色々あったりしたんですけど、その時に、今の彼氏に出会えて、そこからここにも入れてもらって。今、本当によかったとおもってるし、すごく感謝もしてて。だからアイってつけました。よろしく願います」

ボセイ「ああ、」

オモイ「あ、えっと、ここでの呼び名なんですけど。皆、それぞれ自分がこの活動に参加した動機っていうか、自分の一番強い気持ちにしようって、それで」

ボセイ「あー」

オモイ「それが一番、自分のアイデンティティ表すかなってことで。だから、私も、オモイって言ってます。この、正義のために、戦うオモイはだれにも負けないっていうつもりで」

ボセイ「なるほど」

オモイ「、やっぱり、そっちではそんなじゃないんですかね」

ボセイ「ああ、基本的には地名とかですね。本町とか、大和とか」

アイ「へえ」

ボセイ「最初は皆ハンドルネームとかだったんですけど、なんか、どうしても照れがでるみたいで、結局本名明かしちゃったりとかしてたんで。ある程度普通らしいやつにしようって。あと、もし外部に聞かれても、苗字として違和感ないし」

アイ「まあ、ちょっと痛いですよ、もう開き直ったけど」

シロ「えっと、じゃあ、私も、ちょっとあれなのかな」

アイ「まあ、シロはいいんじゃない。別にそんな違和感ないし」

シロ「そうかな」

ボセイ「シロさん、ですね。なんか、いいと思いますよ。かわいくて」

シロ「あ、いや、そんなじゃないんです、なんか。私、何にもないなって。皆みたいに、これっていえることが何もなくって。やりたいこととか、好きなこととか、ほんとまったくなって、昔から。だから、この活動も、そんな自分でも少しは変われるのになって思ってたりとかして。だから、何もないから、シロです。よろしく願います」

ボセイ「はい、こちらこそ。じゃあ私も、そんな感じでいくと、多分、そうだな、ハハだとあんまりだから、ボセイって感じとかでいいですかね」

アイ「ボセイ？」

ボセイ「そう。こう見えてももう、一児の母だから」

シロ「えー」

アイ「うそ、マジですか？」

ボセイ「全然、子育てとかできてないんだけど。産むしかなかったから」
アイ「すごい」

シロ 「え、じゃあ、お子さんは」

ボセイ 「割とまあ、実家でみてもらってて。旦那とも話したんだけど、あ、旦那も一緒に活動してたんですけど、もともと、学生の時から。やっぱり、きちんと参加したいなっていうときに、大分落ち着いてきたから大丈夫かなって」

アイ 「マジですごい、え、もう大きいんですか？」

ボセイ 「もう三歳になって」

シロ 「ほんと可愛いですよね、それくらいの子って、絶対」

ボセイ 「結構大変だけどね」

シロ 「やっぱり」

アイ 「でもほんとすごい。お母さんなんだ。なんかじゃあ、結構似てますよね、私達。すごく嬉しいんですけど」

ボセイ 「ほんとに」

アイ 「なんかほんと、嬉しいです、そんな人と一緒になれて。頑張ります、よろしく願います」

ボセイ 「こちらこそ」

オモイ 「だいたい、そんな感じで終わりでいいかな。あと、この子。コエっていいです。シンプルに、全然、声だせないから、ずっと」

ボセイ 「ああ」

シロ 「ネットだと結構やりとりしてくれてたんですけど。なんか、それによると、やっぱり学校いけなくなっちゃってて、いじめられて。全然自分の、悪くないことで」

ボセイ 「ああ、それで、喋るのが」

シロ 「ええ。一応、だから、コエが、本当に声上げてしゃべれるようにするってのも、私達の目標なんです」

ボセイ 「なるほど」

オモイ 「まあ、こんな感じなんです、私達。だから、ちょっとした秘密のサークルっていうか。スマホとか、ネットで募集したのも、そんなハードル高くしたくなくて。ただ、皆やっぱり、世の中が色々嫌になってて、でもニュースとかみたいに、自棄になって犯罪したりするくらいなら、意味のあることをしようって思ってた。そんなことするくらいなら、集まって正義のために戦おうって。皆ヒーローになれるって。そんな感じなんですけど」

ボセイ 「すごい、その通りだと思います」

オモイ 「コエとかは、実際、自殺とかしようとしたらしいんですね、それだけ世界に絶望してるから。でも、嫌な世界だからって、自分を嫌になることないじゃないですか。嫌な世界を変えるために戦うほうが、きっと絶対後悔しないと思うんです」

ボセイ 「わかります」

オモイ 「、なんか、すいません、一方的にしゃべっちゃって。よくないってわかってるんで

すけど、止められなくて」

ボセイ「いいえ、こっちこそ。すごく気持ち伝わりました。ただ、ちょっとこれから、休みながらの参加になるかもしれないくて、申し訳なくて」

オモイ「いえ、うちもまだ、常に活動できるような状態じゃないんで。メンバー皆、通いながらだったり、週末だけとか。恥ずかしいんですけど」

アイ「やっぱりそりゃ、子供さんのことありますもんね」

ボセイ「ええ、まあ。それもなんですけど」

シロ「他にも、お仕事とかですか？」

ボセイ「いえ、今はそれは、ないんですけど。そうだな、ちゃんと言っておいたほうがいいですね。えっと、またかって感じなんですけど。今、3か月なんです。妊娠」

アイ・シロ「えー」

シロ「おめでとうございます」

アイ「すごい、うらやましい」

ボセイ「ほんと、大変なんだけど。旦那と話して、色々悩んだりもしたけど、でも、やっぱり、自分の都合でおろすっていうのは絶対、したくなくて」

アイ「もちろん、絶対、そうだと思います。私でもそうします絶対」

ボセイ「ありがとうございます。一応、そういうこともあって、こっちにまわしてもらったんですね。なんか、だから、すいません、ご迷惑おかけすることになるかもしれないんですけど」

アイ「全然全然。なんか、すごい立派だなんて思います。私も、そんな風になりたいです。憧れます」

ボセイ「ありがとうございます」

シロ「でも、じゃあ、本当に無理しないでくださいね。そんな身体なんだし」

ボセイ「ええ。でも、そんな、気を使わないでください。私もやっぱり、何があっても最後まで戦いたいっていう気持ちでいますから。それは、この子達のためにも」

オモイ「ボセイさんが迷惑だなんて全然ないですよ。なんだかんだいって、ずっと伝統あるところに所属されてるから。私達にない知識とかノウハウとか、いっぱい持ってて。そういうのもぜひ、私達に教えてください」

ボセイ「はい、私なんかでよければ」

全員で拍手する。

オモイ「これで、新しいメンバーも加わって。いい流れが出来てると思う。私達、やっぱりまだ活動が本気じゃないって言われて、自分達でもそれに甘えてたりするところあるけど。そう見られてるのも悔しいし。やっぱり、本気でやりたいじゃない。だから、これから、より一層みんなで頑張っていきましょう。じゃあ、これで、今日

はあとは皆で楽しく過ごせたらいいかなって感じなんだけど」

アイ 「ね、じゃあカラオケとかしましょうよ。お菓子食べながら」

オモイ 「それちよっと騒ぎすぎじゃない？」

アイ 「そんな、大丈夫だって」

シロ 「あ、でも、ボセイさん、そういうの駄目じゃないですか？」

ボセイ 「あ、いえそんな、大丈夫です」

アイ 「やった、シロ、スマホ音楽かけて」

シロ 「あ、うん」

アイ、マイクを握る。賑やかなBGMが流れてくる。

第三場

舞台上、アイに光が当たる。マイクを持ったままのアイが話し出す。

アイ 「前も、いつてたかなって思うんですけど。私、もともと頭良くないんですよ。だから、嫌なことも多いし、昔から学校休んだりしてたんだけど、段々、いきたくなくなって、ずっと家にいるようになって。そしたら親から、生きてるだけで迷惑って言われて。もうほんと頭きて、大喧嘩して、飛び出して。ぼーっとしたら、声かけられたんです。すごく、優しくしてくれて。それでついてったんだけど、だんだん、うまくいかなくなって。毎日私だけバイトさせられて、自分は遊んでるのってムカつくんだけどってことで、結局しょっちゅう喧嘩して。で結局、向こうがどっか行っちゃったんですけど。その時、もうほんとに何やってるんだろ自分って感じで、もう死んじやいたいなーとか思ってた。そんなときに、書き込みみて、心配して来てくれたんです。普通ありえないですか？そのために電車の手配にきてくれて。だから、その時、もうこれで本当に、最後にしようって。これでダメだったらいくとこないって、だから今度こそここで、頑張ろうって。今までみたいな、なんだろう、生き方とかマジでやめたかって思ってた」

オモイ、手をたたく

オモイ 「はい、お疲れ様」

アイ、座り込む

シロ 「大丈夫？」

アイ 「うん。すいません、ありがとうございました」

全員で拍手する。

ボセイ 「こんな感じなんですネ」

オモイ 「ええ、これも一種の総括かなって。私達、仲間というか、家族だと思っんです、皆が。家族って、なんでも自分のことをさっけ出せるじゃないですか。それでより結束が強くなっていければって」

ボセイ 「なるほど」

オモイ 「じゃあ、今日はこれくらいで解散しようか。お疲れ様。それでごめんなんだけど、ちよっと明日、私が予定入っちゃって、病院いかないといけなくて。オフにしてもいいかな？」

シロ 「どこか、身体でも？」

オモイ 「ううん、全然、ちよっと」

ボセイ 「あ、じゃあ、別に言っておいてもらえたら、やれることはしますけど」

シロ 「ああ」

オモイ 「いいです、そんな。申し訳ないし」

ボセイ 「いえいえそんな」

オモイ 「いいです、ほんとに。リーダー、私ですから」

ボセイ 「あ、ごめんなさい」

オモイ 「すいません。ボセイさんからみたら、うちはそういうとこまだまだ甘いかもしれないですけど、私達なりに頑張りたいから。すいません」

ボセイ 「いえそんな、こっちこそ。すいません」

オモイ 「前に、見せてもらったマニュアルにもありましたけど、そんなに、毎日集合して、かえって周囲から変な目で見られるみたいな、違和感だしてもよくないんじゃないかって」

ボセイ 「ええ、はい、そうですね」

アイ 「え、そんなのあるんですか？」

ボセイ 「ああ、うん。マニュアルっていうか。こんなんだけどね」

ボセイ、小冊子を取り出す。

ボセイ 「時時計っていうの。かわいいでしょ、名前だけ」

アイ 「へー」

シロ 「こんなの、あるんですね」

ボセイ 「ほとんど、昔の、組織のものを参考にしてるんだけど。だから、ネーミングもそこ

からだから。ほんとはもっと、固い名前のはずだったんだけど」

アイ 「うわ、なんか、字がいっぱい。無理そう」

シロ 「だいたい、さっきみたいな話なんですか？」

ボセイ 「うーん、もつと色々。思想的な難しいところは私もよくわからないけど。さっきの、過ごし方とかね、あと武器の作り方とか、実戦的なことだけでも知っておいたら役に立つからって」

オモイ 「時時計もだし、実戦的な訓練から何から、やっぱりボセイさんのところはすごいから。おかげでうちの男子部も、今度ついに作戦行動できるって」

シロ 「え」

オモイ 「今度、戦いにいくんだって。本格的に」

アイ 「すごい、ほんとに？」

オモイ 「ええ、初めての、共同作戦。うちはほとんど後からのつかっただけだけど」

ボセイ 「いえ、そんな」

オモイ 「でもこれで、少しはうちも追いつけるかなって思ってた。やっぱり、実行しないまま口だけって思われたら、悔しいですから」

ボセイ 「ええ、はい」

シロ 「何するんですか？」

オモイ 「詳しくは言えないんだけどね。もうターゲットはもう決まってるみたい。上手いけば、活動資金にもつながるかもって」

アイ 「え、どうやって」

オモイ 「別に、個人に暴力をふるうことが目的じゃないから。解放する代わりに、報酬を得られれば、今後の活動ももっと色々できるでしょ」

アイ 「ああ」

シロ 「身代金、ですか」

オモイ 「そうだけど。そのお金は、すごく悪いことをしてため込んだものでしょう？それを、私達は正しいことのために使おうって。それは悪いことだと思う？」

シロ 「いいえ」

オモイ 「じゃあ、そんな感じで。明日はゆっくりして、また明後日集合しましょう。それまでに連絡はするけど。それじゃ、お疲れ様」

各自 「お疲れ様でした」

全員、上手に退場。コエ、その場に立ち止まり、俯く。アイが立ち止まる。二人に光が当たる

アイ 「久しぶり、元気？聞いたよ、すごいじゃん。今度、戦いにいくんだって」

アイ 「どうしたの、そんな。やっと、非合法入れてもらえたんでしょ。戦ってこなきゃ」

アイ「私たちのために新しい世界をつくってくれるんでしょう？そういつてくれたじゃない。親も学校もみんなから見放されたから、そんな世界を変えようって。そのために、私達頑張ろうって」

アイ、コエを抱きしめる。

アイ「信じてる。信じてるよ。こんな私達でも、幸せになれるって。だから勇気を出して戦って。きつとうまくいくよ。今度の作戦が成功して、いつか、幸せな世界が出来たら。そしたら、私たち二人で暮らそう。ゆっくりして、ボセイさんみたいに子供もできて、仲良く過ごそう」

第四場

舞台上、オモイが立っている。シロが登場。

シロ「こんにちは。あれ、皆まだですか？」

オモイ「ああ、うん」

ボセイ、アイ、上手から歩いてくる。

ボセイ「やっぱり、間違いないらしいって」

オモイ「そうですか」

ボセイ「ごめんなさい、守ってあげられなくて」

オモイ「そんな。それはもちろん、覚悟の上で此方も、戦いにいったんですから」

アイ、崩れそうになる。

オモイ「やはり何か、予想外のことがあった？」

ボセイ「ええ。思った以上にターゲットに抵抗されて。大人しくしようとして、首絞めたらしいんだけど。でもそこに、人が通りかかって、気づかれそうになったから。逃げようとしたんだけど、彼は、向かっていっちゃった。周りも、余裕がなくて、止めれなくて。一人囲まれちゃったみたいで、それで、」

アイ「私のせいです。あの人と話してたんです。前の日に。すごく怖がってて」

シロ「アイ、それは」

アイ「でも、私止めなかった。頑張れって言っちゃった。だからきつと」

シロ「落ち着いて」

アイ 「ごめんなさい、私のせいで、ごめんなさい、私が、私があんなこといったから」
少し間

オモイ 「許さない。絶対、許せない。私達だって、一生懸命生きてる。それを踏みにじられた。やり返そう。このまま下を向いているくらいなら、あいつらの首元めがけてかみついてやろう。それが正しいと、それが私たちの正義だと思う。どうだ、違うか」

アイ、拍手。周りも拍手。

オモイ 「ありがとう。アイ、頑張ろうね。じゃあさっそく行動しないと。もう少し、男子部から詳しいことを聞いてくる」

オモイ、上手に退場

アイ 「ボセイさん。時時計、貸してもらえませんか」

ボセイ 「え」

アイ 「お願いします」

ボセイ 「もちろん、いいけど」

シロ 「アイ、それって」

アイ 「やっとわかったの。あの人が大事なことを教えてくれた。戦わなきゃダメなんだって。私だって、勇気を出すんだ。殺してやる。絶対に殺してやる。私の大事なものを守るんだ」

アイ、冊子を真剣に読んでいる。シロ、ボセイ、立ち去る。アイ、やがて冊子を紙袋に入れる。立っているコエに話しかける。

アイ 「すいません、ちょっといいですか。今これ、無料キャンペーンで配ってます。おうちで試してみたら、よかったらアンケートも、中にあるんで、よろしくお願いします」

爆発音。暗転。

第五場

オモイ 「やっと、始まったね、うちも。本当の戦いが」

アイ 「ですね」

シロ 「怖かったでしょ、アイ」

オモイ 「アイ、いい顔してる。あなたは今、確実に正義に近づいてるよ」

アイ 「はい」

シロ 「アイ、あんまり、ニュースとかみないほうがいいんじゃない」

アイ 「大丈夫」

シロ 「でも」

アイ 「大丈夫だから。私、おかしいのかな。人を殺しておいて正当防衛だなんていえる人間の家族なんて、可哀想だと思えない」

ボセイ 「うん」

アイ 「むしろ、すごくすがすがしい。人殺したはずなのに。なんでなんだろう、自分がわからない、私。シロ、どう思う？」

シロ 「私は・・人が死んだとか殺されたって、よくニュースではみるけど、でも今はそうじゃなくて、なんだろう、ごめん、よくわからない」

アイ 「ボセイさんはどうおもいますか？大切な人、旦那さんとか子供さんとか、殺されたら、どうですか？」

ボセイ 「え」

アイ 「どうですか。私、おかしいですか？ボセイさんだったらどうしますか？」

シロ 「アイ、ちょっと落ち着いてって。向こういこう？」

オモイ 「すこし、休ませたほうがいいね」

アイをかかえ、オモイとシロ、退場。コエとボセイだけが残り、光が当たる。

ボセイ 「それはもう、覚悟していたはずのこと。だよな？」

ボセイ 「こんな形は間違ってる？じゃあまた、逆戻りするの。ネットでも街中でも一生懸命話したって誰も聞いてくれなかったじゃない。そんなの続けても何も変わらなかったじゃない。何も救えなかったじゃない」

ボセイ 「どうしてそんなこというの？駄目だよ、私達がそんなんじゃない。せっかく仲間も増えて、これからののに。私だって頑張ってるんだよ」

ボセイ 「あの子たちは確かに、幼いかもしれない。でもだからその気持ちは、すごく純粋で、すごく強くて。だから、私達も負けられないようにありたいって、応援しなきゃって思うの」

ボセイ 「ありがとう、わかってくれて。信じてるから。この子達の未来のためなら、私、なんだってできるから」

舞台が明るくなる。全員がそろっている。

オモイ「怖くなったんだらうね、結局。一人じゃ無理だから、何人か誘って。男っていつもそう」

アイ「信じられない、ここまできて、やめたいとか。何考えてるんだらう」

シロ「うん」

アイ「許せないでしょ、ここまで来て裏切るとか」

ボセイ「ごめんなさい」

アイ「あ、いえ」

ボセイ「裏切ったわけじゃ、ないと思うんです。弱い人なんです。ただやはり、子供の事気にしてたから。恥ずかしいです、ごめんなさい」

オモイ「ともかく、こうなったら。もうここも使えないから。別の場所をさがしてます今」
シロ「見つかるんですか？」

オモイ「街中を一度ね、離れようと思ってる。どこか山奥とか、そういう一目につかないところ。海外とかも視野に入れてるけど、そこで本当に残った者たちで、共同で生活して。訓練して。だから、改めて皆に聞いておきたいと思う。これから先は、今までとは違う。もちろん今までだって一生懸命だったけど。これからは全部本気。いつ帰れるか、わからないくらい。全てを、正義のためにささげる覚悟を持ってほしい。それでも、皆、ついてきてくれますか？」

アイ「私は、私はもう、戻りません。戻れません。戻りたくありません」

ボセイ「私も、もともと、そのつもりでいましたから。大丈夫です。せめて私は、皆と、一緒にいたいと思います。お願いします」

オモイ「こちらこそ、よろしく願います。シロは、どうする？無理強いしないよ」

シロ「・・・いえ。行きます。行かないと、後悔すると思うから。私たちの、百年足らずなんて多分、あつという間だから。だからこそ、大切にしたいんです、今を。それだけは、ほんとに、そう思うんです」

第六場 全員、立ち上がる。パネルを動かす。オモイ、光の中に立つ。

オモイ「え、水筒？水筒、いるんですか？ごめんなさい。それは、知りませんでした」

オモイ「私、まだまだ甘いんだね。全然わかんないや。がんばらなきゃ」

舞台上、明るくなる。アイ、パネルの向きを少し直して

アイ「すいません、これ、こんな感じでいいですかね？」

オモイ「ねえ、アイ」

アイ 「はい」

オモイ 「ここに来るときに確認したよね。これからは遊びじゃなくなるから、本気だからって。全力で頑張ろうって話したじゃない。なくなっていた人のためにも」

アイ 「はい」

オモイ 「じゃあ、真剣じゃないとおかしいよね」

アイ 「私、真剣じゃないですか」

オモイ 「この間、ここに来るまで助けてもらってたよね。他のチームの人に」

アイ 「えっと」

オモイ 「登ってくるとき、崖」

アイ 「ああ、はい」

オモイ 「なんで？」

アイ 「え、」

オモイ 「男の人に。登るの手伝ってもらって、嬉しそうにしてた。ちがう？」

アイ 「ああ」

オモイ 「もう忘れた？ここに来るときの気持ち。大切な人が殺されたから。だから、そのために全てをかけるっていつてたのに。今、あなたがしてることっておかしくない？」

アイ 「ごめんなさい」

オモイ 「だから、あなたは、あの人が好きなんじゃない。あの人に好かれてた自分が好きなだけ。戦おうとなんかしていいない。戦おうとしている自分が好きなだけ」

アイ 「それは」

オモイ 「そう見えるしそう言われるって話。他から見たら。私たちは違うけど、これからは共同で動いていくんだから。そう思われたら皆が困るでしょ」

アイ 「はい」

オモイ 「おかしいこと言ってる？」

アイ 「いえ。すいませんでした」

オモイ 「いこう。もうすぐ、つくはずだから」

第七場 オモイに光があたる。

オモイ 「今でも、夢に見るの。初めて戦いにいった日のことを。想像してたのと全然違う。それは本当に暴力的で、圧倒的で。逃げ出した。こわかった。泣きながら謝って、それでもいつまでも悪夢は終わらなかった。でも、今となってはそれが良かったと思う。そのおかげで、生まれ変わったから。あの時、自分に絶望して、心の底から自分を憎んで。甘えていた古い私を、破壊して脱ぎ去った後に、本当の正義として生まれ変わることができた。そんなことがあって、わたしは今、この場にいる。私は、そのときもらった命をささげるために今、ここにいるんだと思うの。だから、

私のこのオモイは、絶対に消さない。それが私が今ここに、生きている意味だと思うから」

シロ、手をたたく。舞台上が明るくなる。全員で拍手

アイ 「お願いがあります。殴ってください、私を」

ボセイ 「どうしたの、アイちゃん」

アイ 「昨日リーダーに言われたことが、ずっと、気になってたんです。部屋に戻ってよく考えて、その通りだなって思ったんです。私、全然甘かったって。あの時からずっと、正義のために戦おうって決めたはずなのに、ここにきて結局甘えてて。誰かに優しくしてもらって、しかも、そうされることが、嬉しくって。あの人にもリーダーにも皆にも申し訳なくて」

シロ 「アイ、そんな」

アイ 「ごめんねシロ。私、本当に、弱いね」

オモイ「わかった。私たちは家族だから。家族が間違ってたら、殴るのも家族の役目だから」

オモイ、アイを殴る

アイ 「ありがとうございます。この痛みを、絶対にわすれません。私、今までずっと、周りから馬鹿にされて。それがわかってるのに、表面上は優しくされて、そして、結局拒絶されてきました。でも、今、初めて、リーダーは殴ってくれました。未熟な私に、はつきり違うといってくれました。だから、リーダーを心から信頼します。ありがとうございます」

オモイ「手当しよう。コエ、向こう、つれてってあげて」

コエ、アイを抱えて退場。

オモイ「シロ、何か、いったそうだけど」

シロ 「いえ、そんな」

オモイ「殴るのも痛いんだよ。手じゃなくて、心が痛いんだよ。わかってる？」

シロ 「そうだと思います」

オモイ「皆、勇気がないじゃない。だから、わたしがやったんじゃない。違う？」

少し間

オモイ「私も、アイのこと見てくる。心配だから」

オモイ、退場

ボセイ「シロちゃんは、反対なんだ」

シロ「いえ、ただ、勇気がないだけなんです、言われた通り」

ボセイ「ほんととは、やっぱり暴力なんてないといいね。でも私も、時々、子供叩いちゃうな」

シロ「それは、まあ」

ボセイ「別？」

シロ「いえ、でも、リーダーも言ってたけど、殴るほうも心が痛いって。きっと今のも、

ボセイさんのもの、そうなのかなって思います」

ボセイ「あの人もよくいったな、それ」

シロ「え」

ボセイ「喧嘩したあと。そう言われた」

シロ「え、だって」

ボセイ「いつでも、仲良くできるわけじゃないから。色々あって、産む産まないで、言い争いとか」

シロ「ああ、」

ボセイ「嘘だって知ってたけど、でもどうしても離れられなかった」

シロ「それは好きだから、ですか？」

ボセイ「なのかな。わからない。信じるものが、それしかなかったから。あんな、自分だけ逃げだす人なのに」

シロ「そんな」

ボセイ「でも、まあ、それでも。私、ボセイだからね。守るもの、あるからね」

シロ「はい。ボセイさん」

舞台上が暗くなり、下手からアイとコエが登場。それぞれの場所にたち、光が当たる。

アイ「ねえ、どうしたの。ねえ」

アイ「そっか。そっちも、殴られたんだ。よかったね。なんか、安心しちゃった」

アイ「戦いにいくの？」

アイ「怖いのか？」

アイ「怖いなら、やめたほうがいいと思う。そんな気持ちでいって、死んじゃった人がい
たから。もうそういうの、ほんとと見たくないんだ。ここは戦うための場所だから。
それなら、いてほしくないから」

アイ、コエに近寄り、後ろから抱きしめる。

第八場

舞台上、明るくなる。全員がアイを囲んでいる。

オモイ「どうということなの」

アイ「すいません」

オモイ「あなた自分のしたことをわかってるの」

アイ「すいません」

オモイ「あなたがした総括っていったい何だったの？」

アイ「ごめんなさい、でも、そんな弱い人がいちや駄目だと思って。もうこれからここは、本気で戦う人しかいる資格がない場所なのに、あの人、震えてて、可哀想で。それならいなくなったほうがいいだろうって」

オモイ「この場所も、また破棄しなきゃいけない。密告されるかもしれない」

アイ「それはしないって約束して」

オモイ「何の保証があるの」

少し間

オモイ「アイ。まだ、変わらないんだね。結局、次を見つけたってことでしょ」

シロ「次って？」

オモイ「崖登ってた時、助けてくれたの。その人なんでしょ」

アイ「、そうです」

オモイ「可哀想って、惚れたってことと同じよ」

アイ「そう、なんでしょうか」

オモイ「自分でどう思うかでしょ」

アイ「ごめんなさい。もう嫌なのに。男に振り回されて、強くなりたいのに。なんで、なんで私はだめなんだろう」

少し間。

オモイ「私達皆で、アイの総括を援助しよう。私達で、アイを本気で、気絶するまで殴ろう」
ボセイ「え、」

オモイ「これから共同訓練が始まったら、どうせまた同じことになる。もうそうになったら、これは、私達全員の恥で、私達全員の責任。だから、私達で殴るの」

シロ「でも」

オモイ「やりたくないの？シロもボセイさんも、危機感なさすぎじゃない。もう、本当にこ

こは、戦う決意をした人たちのための場所なんだよ」

ボセイ「はい」

オモイ「ここでアイが皆から殴られて、本当に強い正義に生まれ変わると、可哀想だからって問題を曖昧にしたままで、また無意識に皆を危険にさらして、全員が不幸になるのとどっちがいい？」

シロ「それは」

オモイ「どっち？」

少し間

オモイ「アイ、どう？」

アイ「お願いします。私、もう何もないんです。ここで、最後に残ってくれた皆からも見放されたら、もう本当に何もないんです。だから、お願いだから、私を見捨てないでください。お願いだから総括させてください」

オモイ「わかった。じゃあ、机の上に寝て。目を閉じて、痛みを受け止めて、自分のどうしようもない甘さをかみしめて。きっとそれで、あなたはもっと強く、生まれ変わる」

アイ、机に仰向きになる。金属バットを構えるオモイ。

オモイ「真剣になれよ。こんなんじゃないんだから、腐った世界も自分も変えたいからここにきたんでしょう？じゃあもっと真剣になってよ」

アイ「はい。すいませんでした。お願いします」

オモイ、アイを殴る。コエにバットを手渡す。コエ、アイを殴る

アイ「ありがとう、ごめんね」

コエ、ボセイにバットを渡す。

アイ「ボセイさん、大好きです」

ボセイ「私もだよ。皆、家族だから。がんばろう」

ボセイ、アイを殴る。ボセイ、シロにバットを手渡す。シロ、たたずんでいる。

オモイ「シロ。ここまできて、やめる？それは、この子が、あなたが、私達が受けてきた目

に見えない虐待と同じだよ。悪者になりたくないから他人事のふりをして、透明な壁の向こうであざ笑いながら拒絶し続ける、社会が私たちにしてきたあのずるい虐待と同じだよ」

シロ 「アイ」

アイ 「早くして。私、もうこんな私でいたくないから。もっと強くなりたいから」

シロ、金属バットを振り上げる。

アイ 「シロ。ごめんね。私にげないから。弱くても、頑張るから」

シロ、振り下ろす。全員が静かに去る。

舞台上、アイに光が当たる。アイ、起き上がる。

アイ 「おかえり。お疲れ様。ご飯買ったよ。ビール、飲む？」

アイ 「私も、今日は、いい？ごめんね、なんか。やっぱりわかつちゃうね。また今日、クビって言われちゃった」

アイ 「なんかもう、わかんないや。なんでだろうね。一生懸命やってるはずなんだけど。どうしたらいいんだろうね私達、ほんとに」

アイ 「ごめん、なんか疲れちゃった。今日先に寝るね。きっと、あとで来てね。一緒に寝よう」

アイ 「おやすみなさい」

アイ、目を閉じ、動かなくなる。

第九場

舞台の別の場所に光が当たり、オモイが立つ。

オモイ 「なんで。なんで勝手にそんなことしてるの。なんでずっと寝てるの、なんで起きてこないの。そんなこと望んでなかったのに」

オモイ 「ただ、生まれ変わるっていうことを信じてた。アイも、強くなってほしかった。私も皆も、だから、心からアイのことを思って、応援して。そのための総括。そのための力。前はうまくいったのに。いい方向に進んできてたのに。なんで」

オモイ「いやだ、終わりじゃない。間違ってる。私は、私の正義はこんなところで止まらない。あの時見捨ててしまったあなたを、これから生まれてしまうたくさんのあなた達を救いたい。その気持ちは嘘じゃない」

オモイ「そう、こんなことで終われない。あの子一人の死のせいで、数えきれないほどの貴方達が死んでしまうなんて、あつてはいけない。私はそのために、生まれ変わったんだから。それが私のオモイ」

ボセイ「リーダー」

舞台上が明るくなる。

ボセイ「いきましよう。二人とも、待ってますから」

オモイ「わかった」

机の前に立っているシロとコエ

オモイ「昔、お母さんが教えてくれた。人はね、いい子にしてたら死んだあと空に登ってお星さまになるんだって。だから、今。アイは、星になったんだと思う。私たちを、空から見守ってくれてるんだって。私たちのしたことは、ごめんなかですまないのかもしれない。けど、いつか、私達もきっと、正義のために死ぬから。それで、皆でまた、今度は星になって仲良くできたらいいなって思ってる」

オモイ「どうかな？」

オモイ「ボセイさん、ずっと、何も言ってくれないんですね。こんな時になったら。なんでですか。アイは、あなたのことをあんなに」

ボセイ「ごめんなさい」

オモイ「それはまだ、ボセイさんが私達のこと仲間と思えないってことですか」

ボセイ「そんな、気持ちは、一緒です」

オモイ「言葉だけなら、いくらでも言えます。だから、アイを埋めにいってください、この後」

ボセイ「え」

オモイ「一緒だって言うんなら、できるはずですよ。見せてください。言葉じゃなくて。信じたいですから」

ボセイ「わかり、ました」

シロ 「私もいきます。いかないと、ずっとアイにおいていかれちゃう気がするから」
オモイ 「わかった。頑張ろう。あの子の死を受け止めて、乗り越えよう。私達皆で」

全員で、机を運んでいく。シロだけがその場に残り、光が当たる。

シロ 「アイが、人を殺したとき、自分の事おかしいのになっていました。私、あの時、それは私も一緒だよっていいなかった。だってアイが死んだのに、目の前に死体があったのに、なんか、信じられなくて。哀しいって気持ちかわからなくて、何とか泣かなくちゃって努力してたけど、そのうちそんな努力をしなくちゃいけない自分が最低に思えてきて、自分自身に絶望していたんです。今だって出るはずなのに、出ないんです、涙。本当におかしいのは私ですよ」

シロ 「そういえば、最後に泣いたのっていつだろうって思ってた。小さなころから、泣くことも笑うことも怒ることも、全部、誰かのためだった気がするんです。哀しいとか、嬉しいとか、自分じゃなくて、誰かに向けてのもので。本当は、いつも、見てほしかったから。いつも、傍にいてほしかったから。でもそんなの、誰にも届かなくて。だから、いつの間にか諦めて、私はシロになった。私はシロだから、涙が出なくて。私には涙を流す資格すらなくて。どうしたらいいのか、わからない。そんなになつて、生きてる意味があるのかも、わからない。もう、そんなになつて、生きていていいのか。自信がないんです」

舞台、明るくなる。ボセイ、机を運んでくる。

ボセイ 「『もし自信を無くして、くじけそうになったら、いいことだけいいことだけ思い出せ』って。知ってる？うちの子どもが好きだった」

シロ 「私に、いいことなんて、あったんですかね」

ボセイ 「じゃあ、これから作ろう。いいこと、いっぱい作ろう。そのための家族でもあるから」

シロ 「はい」

ボセイ 「とりあえず、ご飯の準備しよう。知ってる？アンパンマンってね、いろんなヒーローが血を流してばかりいる中で、おなかのすいた子に食事を与える、それだけは絶対に正義だからって、できたんだって」

シロ 「はい」

ボセイ、準備しようとして不意におなかを抑える

シロ 「ボセイさん」

ボセイ 「ごめん、心配かけて」

シロ 「やっぱり、もう身体」

ボセイ 「大丈夫だから。缶詰、とってきてくれるかな？あとパンと」

シロ 「でも、」

ボセイ 「ちゃんと、するから。私のことで皆に迷惑かけられない、大丈夫」

シロ 「はい。お願いします。ボセイさんは、一人じゃないんです。それって本当に、大切なことなんだと思うんです。だから、大事にしてあげてください」

ボセイ、うなづく。シロ、退場。ボセイ、おなかを抑えながら

ボセイ 「そうだね。正義って。壊すんじゃないくて、作り出すんだよね。新しい命を。あなたを、紡いでいくんだよね」

第十場

オモイ、上手から登場。ボセイと机越しに向き合う。

オモイ 「どういうことですか？」

ボセイ 「悩んだんですけど。やっぱり、これから、もっと大変になる前に。一度どこかのタイミングで、病院にいつておいたほうがいいかなって思うんです。もう結構、安定してはいるんだけど、このままじゃ毎日の作業も足手まといで」

オモイ 「それって、逃げたいってことになりませんか、ここまできて」

ボセイ 「いえ、そんな」

オモイ 「嘘嘘。いいですよ。丁度一つ、下山して任務をお願いしたいと思ってたんです」

ボセイ 「ええ、それはもう、できることなら」

オモイ 「ボセイさんにしかできないんです。お願いします。以前、脱走したメンバーがいましたよね。その人に、会ってきてほしいんです」

ボセイ 「それは」

オモイ 「ボセイさんとなら、向こうも安心するから。もう話がついてるんです。だから、一人でなんていいません。男子部にも協力して一緒にいってもらいます。意味、わかりますよね」

ボセイ 「はい。それは、覚悟してましたから」

オモイ 「さすがですね、立派な、お母さんですもんね」

ボセイ 「いってきます」

ボセイ、オモイ、退場。シロ、コエ、登場。

シロ 「勉強してるの？えらいね。こんな時でも」

シロ、コエに寄り添い、本を読む。

シロ 「『生きている人間などというものは、どうも仕方のない代物だな。何を考えているのやら、何を言い出すのやら、仕出来すのやら、自分の事にせよ他人事にせよ、解った例しがあったのか。鑑賞にも観察にも堪えない。其処に行くと死んでしまった人間というものは大したものだ。何故、ああはつきりとしっかりとして来るんだろう。まさに人間の形をしているよ。してみると、生きている人間とは、人間になりつつある一種の動物かな』

シロ 「なんか、よくわかんないね」

ボセイ、オモイ、上手から歩いてくる。

シロ 「ボセイさん、リーダー」

ボセイ 「ごめんね。私、偉そうに言ってる。自分のことになると駄目だね。覚悟してるはずなのに、震えるしかできなくて結局他の男の人に全部任せて」

オモイ 「そんなことどうでもいいんです。残念です。他が作戦を遂行しているとき、あなたは、何をしましたか」

シロ 「え」

オモイ 「助けてって叫んで、走り出した。どこにいくつもりだったんですか。警察ですか」

ボセイ 「わかりません。ただ、その場にそうしていられなかったんです」

シロ 「嘘、ボセイさん」

オモイ 「ずっと、計画してたんですか。山を下りる、そのタイミングしかないと思って」

少し間

ボセイ 「そうかもしれません」

シロ 「ボセイさん」

ボセイ 「ただ、この命を守りたかったから。もう何もなくなっても、それだけは最後に、守りたかったから」

オモイ 「そのために、私達を裏切ってもですか」

ボセイ 「・・・」

オモイ 「どうなんですか」

ボセイ「そうなります」

オモイ「じゃあ。私たちの命と、おなかの中の子の命なら、そっちのほうが大切ってことですか」

ボセイ「はい。私は、ボセイですから」

シロ、つかみかかる

シロ「嘘つき、私達だって家族だって言ったのに。偽善者、信じてたのに」

ボセイ「本当にごめんなさい。でもね、私、」

シロ「もう言わないでください。それだけむかつくんです。そんなこといっても自分の子のほうが大切なくせに」

ボセイ「ごめんなさい」

シロ「私達のもてることって、結局、子供の遊びってことですか。だから優しくしてくれませんか」

ボセイ「そうかもしれない。でも、それでも私は」

シロ「そうやっていつも上から見下ろして。わかったふりをして何もあなたたち大人はしてくれなかった」

ボセイ「ごめんなさい」

シロ「そうやって、余裕ぶって、わかったふりをして。結局何もできないじゃないですか」

ボセイ「ごめんなさい」

シロ「こんなふうに、旦那さんとしてもきたんですか。そうやって殺してきたんですか。

再現してみせてくださいよ、そんなことがボセイなんですか」

オモイ「シロ、それって矮小すぎるでしょ」

シロ、走り去る。

オモイ「ボセイさん。総括してください。あなたが守りたかった幸せは、誰かにとって苦痛だって想像したことありましたか」

ボセイ「ええ。リーダー、可哀想ですね、あなたは」

オモイ、ボセイを殴り、去る。シロ、登場。

ボセイ「『夕やけこやけの赤とんぼ』」

シロ「ボセイさん」

ボセイ「『追われてみたのはいつの日か』」

シロ「ボセイさん、ごめんなさい。お願いします。逃げてください。」

ボセイ「・・・」

シロ「ごめんなさい。私が弱かったんです。ボセイさんに支えてもらっていたから。ボセイさんは私たちのお母さんだっておもってたから。それが違うんだってことが許せなかったんです。ほんとに分かったのに。勝手に、私がすがっていただけなのに」

ボセイ「・・・」

シロ「なんで、総括って殺されちゃうんですよ」

ボセイ「ジャンケンポン、アイコデショ。えらいね。もうちゃんと、わかってるんだね」

シロ「すいませんでした」

シロ、その場を離れる。

オルゴールの音楽が流れる。ボセイ、音楽にあわせて歌う。

ボセイ『何が君の幸せ 何をして喜ぶ わからないまま終わる そんなのは嫌だ』

ボセイ「おなか、痛いな」

ボセイ、うなだれる。明かりが消える。

シロとコエ机を運んでいく。

第十一場

暗い舞台上。オモイに光があたる。コエが見つめている。

オモイ「ボセイさんも、死んだ。せめてと思っておなかの子も、医学部の人間とか、私もなんとかしたくて頑張ったんだけど、助からなかった。ううん、ほんとは、何もできなかった。結局私たちはまだまだ何もできなくて非力だって痛いほど思い知らされて、ボセイさんだった物体をぐちゃぐちゃにして、無理やり引きずりだすことしかできなかった。そして、ただ、女の子だったことだけ、わかった」

オモイ「見たことある？8カ月の赤ちゃんって。もうほとんど人間の形で、真っ赤で、だから赤ちゃんっていうんだって思っ。かすかに動いてて、もう」

オモイ「このキャンプに来る前に、はっきり病院で言われたんだ。昔からずっと病気だった

から、子供はもう、無理でしょうって。その前に、私は誰からも愛してもらえなかったけど」

オモイ「私は、どう見える？嫉妬に狂った鬼ばあか？独裁者か？殺人鬼か？どれも、どれにもなりたくないってなかったのに」

オモイ「ばかげた事って知ってるのに。知ってたのに。結局まわりつづけてる。五十年前と変わらなくて、生まれる前の、聞いたこともなかった歴史にすら追いつけなくて。何の意味もないのかもしれない」

オモイ「こんなことを繰り返して、深くなるのかゼロなのか。どこで間違ったのか、間違ったことすら違うのか。ねえ、教えて。私は、正しいよね？正義のはずだよね？」

舞台、明るくなる。

シロ「そうやって、ずっと過去の記憶で自分をごまかし続けて。自分自身すらだまし続けて。そんな自分が惨めだって思わなかったんですか」

オモイ「なにもない真っ白だったくせに。ただただ臆病になって、反抗することだけ一人前に覚えてしまった。次はお前を総括する番だ」

シロ「私だってもうシロじゃない。白い振りをしていたらしいのまにか、血塗られた手になっていた。自分を変えるつもりでいたのに、昔と何もかわらなかった、それでも、私は、私の責任からにげちゃいけないって、それだけは今思っている」

オモイ「じゃあどうするの、逃げ出すの？ここまで来て、それこそ許されると思ってるの？」

激しい衝撃音。

オモイ「なに、どういうこと」

シロ「知らなかったんですか。あなたがボセイさんの遺体を凌辱している間に、私達は、終わってたんです。他のチームはもう、ほとんどやられてます。うちの男子部なんか、全員投降したでしょうね、きっと」

オモイ「なんでもっと早く知らせに」

シロ「残ってるのは、一番奥のこだけ。脱走者を許しちゃいけないって、ほんとでしたね。誰かが密告したら、権力が本気を出したら、あつというまに吹き飛ぶくらいのちっぴけな、愚かなことを、私達あんなに真剣に、命がけでやってたんですね」

オモイ「まさかお前が」

シロ「そうだったらどんなにいいか。こんな偶然に頼るしかなくて、私達は最後まで臆病

で、誰かが何とかしてくれるのを待っていた。正義なんて結局、なれないまま。血まみれの手で耳をふさいでいただけだった。だから、こんな終わり方、何の価値もない」

オモイ「嘘でしょう？ 私たちが積み上げてきたものを全部、捨てるつもり？ 皆の残してくれた思いを裏切るの？」

シロ「そうやってあなたの都合いい言葉に流されてきて、結局誰一人助けられなかったじゃないですか」

激しい衝撃音。

シロ「最後に、一つだけ聞かせてください」

オモイ「何、こんな時になって」

シロ「もし、あなたが。あの時に戻れたらどうしますか？ あの、戦おうとして怖くなって逃げ出して誰から見放されて、でも、約束された平穏な日々に戻れるとしたら。あなたは、どうしますか」

少し間。衝撃音。

シロ「どうするんですか」

オモイ「決まってる。もう一度やりなおせるなら、もう一度やる」

シロ「それが人を傷つけてもですか。また、五十年前と同じ、こんな悲惨なことにしかならずなくてもですか」

オモイ「それでもそうとしか生きられなかったから。人に与えられた幸せなんていない。それが、どんなに魅力的でも、私には似合わない。私はそれなら、泣いているあの子の傍にいる」

オモイ、襲い掛かるすきを窺う。やや間

シロ「わかりました。コエと一緒にいってください」

オモイ「は？」

シロ「はやく、こんなことしてる間に。コエを連れて、逃げてください。向こうはきっと殉教者を出したくないから、私がここにとどまれば、少しでも時間を稼げるかもしれません」

オモイ「残念だな、覚悟してると思ってたのに。死にたくなくて、そんなちょっと変わった命乞いをしてみたりするんだ」

シロ「そんな程度にしか私を見てくれてなかったんですか」

オモイ「死んでいった沢山の仲間を裏切って、自分だけが全部わかったようなふりをするな」
シロ「あなたなんかと違って。今更もう、世界を変えようなんて夢見てないんです。ただここに残ることだけが、最後に私に許された償いだと思ってるんです」

オモイ「尊い自己犠牲のふりをしたいの？そんなことをしたって、無駄死にするだけ」

シロ「そうかもしれない。でも、じゃあ、正直にいます。あなたを、あなただけは絶対に、正義のヒーローなんて認めたくないんです。生き延びるために、醜く必死にさがいて見せてほしいんです」

オモイ「なるほど。はじめて、あなたのことが少しわかった気がする」

少し間

オモイ「ねえ。あなたは、死んで英雄になりたいの？そんなに真っ白な自分に意味が欲しいの？」

シロ「わかりません。そうなのかもしれません。ほんとに、そんな判断なんかつかないくらいすごく怖いんです。でも私は一人じゃなくて。昔も今もずっとこれから、こんな風にしか生きられない、私みたいな人間がいるんです。確実にいるんです。そして、今、私が死ぬことで誰かの何かになれる。その確信だけで、勇気がでるんです」

オモイ「何も信じられず染まらずにシロでしかいらなかったあなたが、最後にそんな幻想的な理想にすぎるなんて」

シロ「ちようにいいじゃないですか。幻想的な理想を夢見て、絶望して、でも諦められなくてここまで私たちはきてしまったんですから」

少し間

オモイ「シロ。昔、いったよね。百年足らずなんて、終わればあつという間で。きっと世界から見たら私達なんてどうでもよくて、だから大切に。大切にありたいから、私達は正義になろうとしてた。違う？」

シロ「それも結局、幻想でしかなかった」

オモイ「それを決めるのはお前なんかじゃない」

シロ「自分だって何度も認めてたくせに」

オモイ「違う。私はあなたと違うから。敗北主義に陥るほど弱くない。正義は偶像なんかじゃない。確実に、触れる信じられるもの」

シロ「じゃあ早く。あなたが言う確実で圧倒的な力がもうそこまでやってきてる。そうなら、もうこんな話も気持ちもふっとんじやって何もできなくなるから」

オモイ「それでも最後にいわなくちゃいけないの。私達は、一瞬でしかないこの時間の中で、

正義のつもりで戦った、必死にもがいてた。それを後の歴史は、きっと勝手に意味づけて、それが人間だと、自分の理解の範囲の中で評価する、あるいは見なかったふりをする。私たちがしてきたように。私はそんなの絶対に嫌。私たちがしてきたこともしたかったことも、わかったつもりになんてさせてたくないから。まだ、それなら、私は動物で居続ける。いつかきつとなんて幻想も、優しい慰めもほしくない。何もわからないこの世界で、私のこの手につかめるものだけが、唯一信じられるから。そのために、この手で戦い続けることが、私を駆り立てるこの衝動が、私の、私はオモイだから」

オモイ、コエの腕を強引にとり、退場。

爆発。壁が壊れる音。パネル上下にはける。続いて足音。一瞬の間。パネルの後ろに立っていたコエが離れて見つめている。

シロ 「こんにちは。はじめまして。私たちが、そんなに憎かったですか？私、そんなに真剣な顔で睨まれるの、生まれて初めてなんです。こんな時にほんと不謹慎なんですけど、そんなに憎悪を向けてもらえたの、生まれてはじめてで、嬉しくて仕方ないんです。ひよつとしたら、この瞬間のために生きてきたんじゃないかってくらい、今最高にどきどきしてます。私、ずっと考えてました。でも、正義なんて結局何なのか、わかりませんでした。でも、けど、それでも。だからこそ、最後に言わせてください」

シロ 「私達も、きつと、私自身がそうだったように、ニュースになって人の口の端に上って勝手な感想とおざなりの対策が立てられて、そして次の刺激の波がきたら簡単に捨てられてしまうんですよね。私たちが住んでるのはもう、そんな世界なんですよね」

シロ 「そうやって私達を封印して、なかったことにすればいい。でも私は、私たちはいる。今も五十年前もきつとこれから。私たちはいる。きれいもきたないもあわせもつて、残酷で無様で幼稚なままで、ここに立っている。あなた達が求める何者にもなれず、何の価値も持たず、何をしてもいいかもわからない。今何を言ってるのかもわかっていない。でも、それでも、声を上げないと。叫ばないと。こうとしか生きられなかった私達がここにいて、伝えないと。そうしないといけないっていう確信だけは強くあってそうじゃなかったらきつとまたいつか、同じ繰り返しが続いていつていつの間にか私達はどうしてもないところにきちゃったからもうそんなのは嫌だから」

シロ 「声をあげて」

コエ、顔を上げる。

シロ 「世界があなたに残酷でも、自分に何の価値も感じられなくても、目を背けないで。自分で考えることができなくても、自分が信じられなくても、他人から与えられた正義なんかにすがらないで」

シロ 「多分ね、生きているっていうのは、ただ息をすることじゃない。ただ心臓が動いてることじゃない。誰かのモノになって安心することなんかじゃない。もつと何か、どうしようもなく乱雑で、みじめで、かつこわるいままの、誰にも決められない私自身として、生き物として存在するっていうこと。今、こんなどうしようもないところになってようやくそれがわかったから、だから」

シロ 「だから。私に銃を向けているあなたは、生きていますか？」

暴発する銃声。銃弾は命中せずに通り返る。

シロ 「大丈夫。怖いなら、きっとまだあなたは生きている」

シロ、誰かに語り掛ける。

シロ 「あなたは、あなたはどうですか？この声が届く誰か、あなたは生きていますか？笑っていますか？泣いていますか？かつての私みたいに、そのどちらもできなくて、ただ生きているふりをしているだけですか？」

シロ、二・三步前に歩く。銃撃音。

シロ 「小さくたっていい。十分だから。上手くなくてもいい。あなたが決意したこと、それがもうすでに、価値だから。おかしくってもいい。誰かのためじゃなく、あなた自身のためにあなたはいるのだから」

シロ、空を見上げる。

シロ 「何も信じられず、何も考えずに過ごし、何もできないまま悲劇を繰り返してしまっ

た、そんな私たちに生きていた意味があるのなら。もし、世界が、こんな私たちが正義のヒーローであることを許してくれるなら。今、最後に一度だけ、勇気をください」

シロ、叫ぶ。コエ、続いて叫ぶ。少し間。激しい銃声。赤く染まる世界。

やがて舞台上が暗くなり、音楽とともに光が差し込む。その中にアイが立つ。

アイ 「私は、アイだった」

光が差し込む。その中にボセイが立つ。

ボセイ 「私は、ボセイだった」

光が差し込む。その中にオモイが立つ。

オモイ 「私は、オモイだった」

光が差し込む。その中にシロが立つ。

シロ 「私は、シロだった」

光が差し込む。その中にコエが立つ。

コエ 「私は、コエだった」

全員 「私は、私たちは、正義だった」

アイ 「私たちは、きっと」

ボセイ 「たぶん」

オモイ 「おそらく」

シロ 「もしかしたら」

コエ 「それでも」

アイ 「実は」

ボセイ 「まるで」

オモイ 「案外」

シロ 「結局」

コエ 「それでも」

全員 「それでも」

全員 「それでも。それでも、私達は、正義だった。私たちはそれでも正義だった」

終

引用

『アンパンマンたいそう』 作詞 やなせたかし 作曲 馬飼野康二

『無常ということ』 著作 小林秀雄

『赤とんぼ』 作詞 三木露風 作曲 山田耕筰

『アンパンマンのマーチ』 作詞 やなせたかし 作曲 三木たかし